峡東地域教育情報誌１７９号（令和８年度１１月号）
AREA WEB
令和８年１１月１６日発行
峡東教育事務所
教育支援スタッフ（担当）
電話　0553-20-2731
Fax　0553-20-2733

【副所長から】

足元から、その先に

山梨県教育委員会　峡東教育事務所　副所長　早川 賢一

本誌の記事には、地域のよさを知る、多様性にふれる、未来や世界とつながる、そんな子供たちの姿があふれています。ふれあう、学び合う、つながる、広げる。そのような豊かな活動が峡東地域の各地で行われていることを大変嬉しく思います。そして、その一つ一つから関係諸機関や地域の皆様、先生方が子供たちを思う温かな気持ちが伝わってきます。

子供たちは、様々な人やもの、出来事との出会いの中で、新しいことを知り、興味や関心を広げていきます。「なぜだろう」「もっと知りたい」という問いが生まれたとき、学びはさらに深まります。そして、知識と経験を結び付け、友達との対話を通して考えを深めながら、自分なりの見方や考え方を形成していく。そこに「深い学び」の一つの姿を見ることができます。

地域の方々との関わりや地域の財産にふれる機会には、学校だけでは得ることのできない貴重な経験があります。こうした出会いは子供たちの感性を育み、自分の住む地域への誇りや愛着につながっていくのではないでしょうか。私自身も学校訪問や日々の生活の中で、地域に受け継がれてきた文化や人々の温かなつながりにふれ、改めて峡東地域の魅力を実感しています。



副所長　早川　賢一　氏
平成６年、富士見小学校に新採用。峡東教育事務所指導主事、富士見小学校教頭、義務教育課主幹・管理主事を経て、令和８年度から再び峡東教育事務所に勤務。趣味はささやかな家庭菜園。

例えば、「山梨といえば何を思い浮かべますか」と問われたとき、多くの人が果樹やワインなどを挙げるでしょう。しかし、「なぜそうなのか」と問いを深めると、山梨の地形や地質、気候、歴史、そして先人たちの知恵や努力へとつながっていきます。地域の特色は、多くの要素が結び付いて形づくられています。自然や風土、歴史、人々の暮らしや文化などを関連付け、その地域ならではの価値を見いだそうとする考え方が「文化的テロワール」です。峡東地域の果樹栽培や枯露柿、ワインづくりにも物語があります。「なぜこの地域で育まれてきたのか」という問いを通して見つめ直すことで新たな価値や魅力を発見し、発信する取組が進められています。

こうした「なぜ」を大切にし、物事の背景やつながりに目を向ける姿勢は、子供たちの学びにも通じるものがあります。一人一人の気付きや発見を大切にし、それらを結び付けながら学びを深めていくことは、まさに探究の過程です。地域を深く知ることは、決して地域の中だけに目を向けることではありません。足元を見つめ、「なぜ」と問い、その背景を探ることは、他の地域や文化を理解し、多様な価値観にふれ、世界へと視野を広げることにつながります。

峡東という豊かな学びの場で、子供たちの「好き」や「なぜ」が、人や地域との出会いによって広がり、自ら問い、学び合いながら成長していくことを願っています。そして、その学びが地域から未来へ、そして世界へとつながり、ふるさとに誇りをもち、多様な人々と協働しながら持続可能な社会の創り手として活躍する力へと結びつくことを期待しています。

私たち教育事務所も、学校や家庭、地域の皆様と力を合わせながら、子供たち一人一人の学びがより豊かに広がり、地域から未来へ、そして世界へとつながっていくよう、ともに歩んでまいります。今後とも皆様方の温かなご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

不登校対応スキルアップ研修会　【笛吹市教育委員会】

研鑽を積む

笛吹市教育委員会では８月２５日（火）に境川小学校において、不登校対応スキルアップ研修会を行いました。研修には笛吹市内の小中学校の教職員を中心として約８０名が参加しました。講師は山梨大学教育学部准教授の田中健史朗先生が務めました。田中先生は心理学が専門で、いじめや不登校の対策について、各関係機関の委員としてもご活躍されています。


講師の田中先生

現状を知る

講義は子どもたちが置かれている現状を知ることから始まりました。不登校児童生徒の割合の推移から、脱ゆとり教育を始めてから割合が増えている点に着目され、１時間あたりに学習する内容量が増えてしまう「カリキュラム・オーバーロード」が一因になっているのではないかという提起がありました。さらに、大人が必要だと考える内容を増やしたことから、子どもが好きな（楽しい）内容が相対的に減少してしまっているのではないかという危惧についても触れられていました。


講師からの質問に挙手

解決に向けて

不登校の事前防止対策として、学校に行きたくなる仕掛けが大切になるそうです。甲府市での事例も紹介され、２学期からできる取り組みを先生方は検討していました。事後の対応としては、児童生徒を教室に復帰させるためには時間がかかるため、社会的自立を目標にすることが良いそうです。そのためには休み方を変えることが重要となります。特に、対人交流をする機会を確保することで、つながりから自己肯定感を高めることができ、教室復帰のきっかけになることがあるそうです。少しでも困り感がある子どもや保護者が、安心できるような教育活動が進むことを願っています。


子どもの気持ちになって課題

福祉講話　【山梨市立日下部小学校】

聴覚障害者から学ぶ

９月２５日（金）、日下部小学校において福祉講話が行われました。講師は山梨市聴覚障害者協会副会長の飯島康夫さんと手話通訳士の小山さんが務めました。飯島さんは３歳の時に病気によって聴覚をなくしてしまったそうです。聴覚をなくしてからは、ろう学校に通い、先輩の手話を見ながら自然に手話を覚えたそうです。


講師の飯島さん

工夫して生活

聴覚障害者は、見た目だけでは健常者と見分けがつきにくいため、わかりにくい障害と言われているそうです。講話の前半では、日常生活を送るために様々な工夫をしていることが紹介されました。例えば、家にお客さんが来たときにチャイムを鳴らすと思いますが、聴覚障害者には音は聞こえません。そのためライトが点灯して来客を知らせる装置を用いることによって、課題を解決しているそうです。他にも新たな技術が誕生し、不便が解消することが増えてきているそうです。休み時間中には装置に興味を持った児童たちが、飯島さんの周りに集まっていました。


ライトを実際に操作

手話を学ぶ

後半では手話を学びました。事前に拍手などの手話を学んでいた児童たちは、手話に興味を持ち始めているようでした。基本的なあいさつや数字を表す手話を教えてもらった後、少し難しい数字の問題が出題されました。児童たちは自ら考え、手話で表現をしている姿があり、自分なりに答えを導き出そうとする姿勢は、とてもすばらしかったです。講師の先生からは覚えるのが早いとお褒めの言葉もいただき、児童たちは喜んでいました。今回学んだことを生かして、困っている人に優しく声かけができるといいですね。


手話に挑戦する児童

甲州市「宇宙の学校」　【甲州市教育委員会　生涯学習課】

宇宙の学校とは


講師の中村先生

９月５日（土）に甲州市民文化会館において、甲州市「宇宙の学校」が行われました。この取り組みは宇宙航空研究開発機構（ＪＡＸＡ）と認定ＮＰＯ法人子ども・宇宙未来の会（ＫＵ－ＭＡ）との共催で行われています。年間４回の活動（今回は３回目）があり、身近な教材を使って児童たちが日常や身の回りで起こること、不思議に思う現象の仕組みなどを親子で協力し、工作や実験をしながら学ぶ体験教室です。

協力して作業


グライダーを滑空

甲州市内の小学校１年生から６年生までの親子２０組が参加し、今回は「ストローグライダーを飛ばそう」という実験に挑みました。講師は中村直人さんが務めました。実験に入る前に、宇宙についての話（クイズ）や星座の話を行い、児童たちは宇宙空間の不思議を感じ取ることができたようです。実験に入ると児童たちは講師の指導を聞きながら、保護者と協力をして、ストローグライダーを完成させました。完成した後は実際に飛ぶかどうかを試し、うまく飛ばない場合には羽や重心に改良を加えていました。


親子で協力

ボランティアも協力

甲州市「宇宙の学校」には様々なボランティアの方々が協力をしています。今回は塩山中学校科学技術部の生徒が作業の支援を行いました。他の回では日川高等学校ＳＳＨ（スーパーサイエンスハイスクール）コースの生徒が協力するなど、地域の先輩が指導に携わってくれました。教えることから学ぶことも多く、生徒たちには貴重な経験となったようです。峡東地域から航空宇宙業界で活躍する人材が誕生することを期待しています。

考古博物館出前授業　【甲州市立大藤小学校】

地域の歴史を学ぶ


説明を真剣に聴く

大藤小学校は９月８日（火）に３・４年生の児童を対象に、考古博物館による出前授業を行いました。講師は考古博物館や埋蔵文化財センターの方々が務めました。大藤小学校周辺には、安道寺遺跡をはじめとして数多くの遺跡があることから、地域の歴史・文化・食生活の探究活動が行われています。今回はその一環として縄文土器の製作体験が行われました。


縄文土器に触れる

縄文時代について

授業の初めには縄文時代の生活について復習が行われました。時代巻き尺を用いて縄文時代の長さが説明されると、児童たちは縄文時代の長さに驚いていました。大藤小学校周辺の遺跡調査から、この地域には約５，０００年前から人々が生活していることが紹介され、学校周辺はなだらかな傾斜地で日当たりも良く、近くに川があることから昔の人々が生活をしていたようです。児童たちは自分たちが生活している地域の歴史の深さを感じたようでした。


製作した作品

土器作りにチャレンジ

児童たちは、周辺遺跡から発掘された土器を模して、その一部分を製作しました。土粘土を手作業で成形する作業では、時間の経過によって土粘土が固くなり、うまく成形ができない児童もいましたが、講師の先生方からアドバイスを受け、手に水をつけながら完成を目指しました。一部の児童は、土粘土の色や形から「カレールーやチョコドーナツのようだ」とユニークな表現をしていました。予定時間を少し過ぎてしまいましたが、全員が完成させることができました。乾燥・焼成後に作品が手元に戻ってくるのが楽しみですね。

笛吹こどもチャレンジ 2026 夏　お仕事体験してみよう　【笛吹市社会福祉協議会】

子どもたちのために

笛吹市社会福祉協議会では８月２５日（火）に、笛吹市内の小学校４年生から６年生の児童（約１００名）を対象に「お仕事体験してみよう」をシャトレーゼホテル石和で開催しました。この取り組みは、子どもたちの健やかな成長と夢や希望を応援するために創設された「あい子ども応援基金」を活用し、今回で３回目となり、毎年申込者が多く人気のあるイベントです。「子どもたちの力になりたい」と近隣の企業・団体の協力により 12 ブースで様々なお仕事体験が行われました。

様々なお仕事体験

今回の体験内容は、看護師、薬剤師、法律家、建築士、郵便局員、デザイナー、ものづくり、理学・作業療法士、花屋さん、警察官、消防士、ジュエリー製作者でした。ものづくりでは、３Ｄプリンタで製作したものの仕上げ作業、花屋では、フラワーアレンジメント、警察では鑑識作業、薬剤師では薬の調剤、建築士ではタブレットを用いた家の設計などの体験が行われました。子どもたちは様々なお仕事体験を行うことで、将来の自分の夢や目標に向かって何が必要かを考える機会となったようです。

学生ボランティアの活躍

「お仕事体験してみよう」では、県内・外（笛吹市出身者）の大学生がボランティア協力をしていました。各ブースでの補助や子どもたちへの付き添いなど様々な場面で力を発揮していました。講師の先生方の指示をもとに、子どもたちをサポートする姿はとても輝いていました。今回の経験を今後の進路選択の参考にしてもらいたいです。



様々なお仕事体験

モルックにちゃれんじ！！　【笛吹市教育委員会　生涯学習課】

新しいスポーツに挑戦

９月１３日（日）に境川スポーツセンター体育館において、子ども講座「モルックにちゃれんじ！！」が行われました。今回は八代・境川・芦川地区の親子２０名あまりが参加をしました。講師は笛吹市モルック協会・日本モルック協会認定モルック指導員の中根さんと今井さんが務めました。



講師の中根先生

モルックとは

モルックは、フィンランド発祥のスポーツで、木の棒でできた「モルック」を投げて、数字が書かれた木製ピン「スキットル」を倒し、合計得点 50 点を目指して競います。ルールはシンプルですが、「どのピンを狙うか」「あと何点必要か」を考えながらプレーするため、運も必要ですが戦略性も求められます。また、モルックは激しい運動を必要としないため、体力や運動経験に関係なく誰でも気軽に参加できる競技です。プレー中は自然と会話が生まれ、チームで作戦を考えたり応援し合ったりすることで、交流を深めることができるのも魅力の一つです。



狙いを定めて



離れたスキットルを倒す

実際にやってみると

今回は時間の関係で３０点に縮小した形で競技を行い、家族同士の対戦や子供対大人で対戦するなど、チームを入れ替えながら行いました。状況を見ながらチームでの作戦会議や応援など、大きな声があがっていました。途中で講師による投げ方の指導も行われ、子どもたちばかりでなく大人も真剣に聴き入っていました。将棋などと同じで、何手か先のことを考えられるようになると勝率が上がるようでした。今回の体験をきっかけに、将来日本代表として世界大会などに出場する選手がでるといいですね。

ＪＡ食農教室　【甲州市立玉宮小学校】

野菜ソムリエから学ぶ

９月１７日（木）、玉宮小学校においてＪＡフルーツ山梨による、食農教室が５年生の児童５名を対象に行われました。講師は野菜ソムリエ上級プロの加藤恵美子さんが務めました。加藤さんはＴＶにも数多く出演されており、軽妙な語り口と豊富な知識で児童の心をつかんでいました。


講師の加藤先生


講師の質問に答える

山梨はフルーツ王国

山梨はぶどう・桃の出荷量が全国一で、特に峡東地域では栽培が盛んに行われています。山梨がフルーツ王国になったのは、元々養蚕業で桑を育てていた畑を果樹園に転換したのがきっかけで、特に峡東地域の土地は、盆地特有の傾斜地で水はけが良く、日照時間も長いため果物の栽培に適していたそうです。児童たちは加藤先生からの質問に答えながら、知識を深めることができたようです。

果物を食べよう

日本人は果物の摂取量が不足しているため、体に必要な栄養素（ビタミン・カリウム）が不足することが多いそうです。加藤先生から、果物についてのクイズが出題され、すっぱい果物の方がビタミンＣが多く含まれているという問題では、すべての児童が間違えてしまうなど、イメージと実際の違いを知ることができ、児童たちは興味深く話を聞いていました。ぶどうの試食では、なるべく皮まで食べることで栄養が多くとれることが説明され、児童たちは皮までしっかり食べていました。今回の授業で学んだことを家族で共有して、果物を毎日食べる習慣が身につくといいですね。


最後にみんなで記念撮影！

東山梨・笛吹市中学校新人体育大会

練習の成果を発揮して

令和８年度の「中学校新人体育大会」が１０月８日～東山梨地区、９日～笛吹市でそれぞれ開催されました。３年生が引退して１・２年生が部活動の中心になりました。日頃の練習の成果を発揮することができたでしょうか。

















【団体競技　優勝校（地区別）】

種　目	東山梨		笛吹市	
	男子	女子	男子	女子
野　球	甲州市野球クラブ		石和	
サッカー	山梨北・笛川			
ソフトボール		塩山		
バスケットボール	塩山	山梨北・笛川	石和	一宮
バレーボール	YAMANASHI VC JETS	山梨南	一宮・春日居	石和
卓　球	山梨南	塩山	春日居	一宮
ソフトテニス	山梨南	KSTC	浅川	浅川
剣　道	勝沼	勝沼	（個人戦のみ）	（個人戦のみ）
柔　道	（個人戦のみ）	（個人戦のみ）	（個人戦のみ）	（個人戦のみ）
ハンドボール	山梨南	山梨北		
弓　道			石和Ａ	石和Ｃ
バドミントン	（個人戦のみ）	（個人戦のみ）		
陸　上				

産業技術短期大学校体験授業　【甲州市立塩山中学校・山梨県立産業技術短期大学校】

体験から学ぶ

９月２８日（月）塩山中学校の２年生が、産業技術短期大学校において体験授業を行いました。生徒の希望に応じて、生産技術科、観光ビジネス科、電子技術科、情報技術科のうち１つの授業を受けました。中学校では学ぶことのできない、専門的な技術に触れる貴重な機会となったようです。

様々な体験授業

生産技術科では、３次元ＣＡＤの体験や３Ｄプリンタで製作した樹脂でできた部品に、いくつかの金属部品を取り付けるストラップ作りが行われました。簡単な作業でユニークなストラップが完成し、生徒たちは喜んでいました。観光ビジネス科では、レストランのホールスタッフ体験が行われ、ナフキンのたたみ方やナイフやフォークなどの扱い方などを学びました。元々ナイフやフォークは銀でできていて、銀は毒物で色が変わるため、食の安心・安全が証明されるとの説明を聞き、驚いている生徒もいました。電子技術科では、センサとコンピュータを用いた遠隔操作体験や卒業生が製作したバランスロボットの実演が行われました。バランスロボットの実演では、長い棒が倒れないように土台が左右に移動する様子を見て、生徒たちから歓声があがりました。情報技術科では、ＡＩを用いたゲームの製作体験が行われました。ＡＩに簡単な指示を出すだけでプログラムが作成される様子に、生徒たちは興味を示しているようでした。

求められるもの

技術の進化に伴って、人間に求められるものも日々変化をしてきています。このような時代だからこそ必要なものとして、様々な経験を積むことの大切さや日頃の勉強をおろそかにしないことが大切だそうです。生徒たちは、今後の生活でチャレンジ精神を持つことや勉強に取り組む姿勢について考える機会となったようです。



様々な体験授業



合同避難訓練　【山梨市立つつじ幼稚園、山梨県立山梨高等学校】

大規模災害に備える

つつじ幼稚園と山梨高等学校は８月２８日（金）に、合同避難訓練を行いました。この取り組みは、大規模災害が頻発していることを踏まえ、道路を挟んで向かい合っている立地から、有事の際に協力することによって円滑な避難を行うために実施されました。

高校生が園児を誘導

３～５歳の園児 15 名は地震発生後、机の下に身を隠しました。揺れが収まったところで、教諭の指導の下、建物からの避難を開始しました。園の外では山梨高校の生徒が待機しており、園児の人数を確認しながら一人一人手をつないで、山梨高校のグラウンドに避難をしました。生徒たちは園児に優しく声をかけ、落ち着いて避難をすることができました。避難時の歩行の速さなどの課題も見つかったので、今後も同様の訓練を実施し連携を深めていくそうです。


慌てずに階段を下る

園児の手を取り避難

机の下に身を隠す

互助・共助の大切さ

災害が起きたときは、自治体などの行政の力だけでは、すべての住民を守ることは現実的に困難になっています。そこで大切になるのは互助・共助です。今回の訓練で、近隣や知人で助けが必要な方がいた場合に手を差し伸べるという、互助・共助を高校生が考えるきっかけになったのではないでしょうか。災害の際には地域を支える人材として、活躍することが期待されます。